

我々はいまなおフィクションのパラドクスに関心を持つべきなのか？

ロバート・ステッカー
調 文 明 訳

フィクションのパラドクスは、相矛盾する三つの命題を提示する。そして、それら三つの命題すべてが妥当である、あるいは捨て去りたいと考えられている。そのパラドクスの例を以下に示そう。

命題一 サリーはアンナを憐れむ（アンナとは、トルストイの小説に登場する人物アンナ・カレーニナのことである）。

命題二 誰かを憐れむ（*piti*）ためには、彼らが実在し、苦難を受けている（かつて受けてきた）と信じなければなら
ない。

命題三 サリーはアンナが実在するとは信じていない。

もしも、これらすべての言明が妥当である、あるいは捨て去りたいと我々が判断した場合、我々はひとつの矛盾に身を委ねることになってしまふだろう。というのも、それらの言明はサリーがアンナを憐れみ、かつアンナに憐れみを抱かないことを含意する。すなわち、命題二と命題三はサリーがアンナに憐れみを抱かないことを含意するが、命題一はサリーがアンナを憐れむと主張する。

問題はここにある。このパラドクスは、情動にかんする「認知説 (cognitive theory)」の最盛期に形成されており、その当時は多くの理論が命題二やその変種を支持していた。しかし、今はもう、命題二を受け入れる者が、誰一人いないことは明らかである。ひとつには、その命題は主張としてあまりにも強すぎるのだ。我々は、過去存在していたが、今はもう存在しない人々を憐れむことができる。我々は、仮定の未来に生きる人々を憐れむことができる。我々はまた、米国中西部における次の大地震を恐れる (fear) といった、今まで現実化しなかったし、これからも決して現実化しないと思われる出来事について、何かしらの情動を抱くこともできる。そのような場合、我々は、情動を向けた対象が存在しているとは信じていない。最後に、危険な状態にはいないと知りながら怖がっているという、恐怖症によって引き起こされる情動といった不合理な情動を抱くことも可能であろう。おそらく、ジムの蛇恐怖症はあまりに極端なので、前方にあるものが精巧に模した蛇のレプリカであると知っていて、前方に現実の蛇がいないことも、そして現実の蛇が引き起こす危険など全く無いこともわかっていながら、それでも彼は怖がるのである (ジムの恐怖症が、危険な状態にいるという信念と危険な状態にはいないという知識とが共存する不合理な信念を生み出すかどうかは、疑問の余地がある)。

加えて、命題二以外の他の命題のひとつを否定する形でパラドクスの解決法を支持する論者にしても、命題二は否定している。こうして、ケンドール・ウォルトンはよく知られているように、サリーは想像上ではアンナを憐れむが、文字通りにはアンナに憐れみを抱かないと主張するのである。ここから、彼のパラドクスの解決法は、最終的に命題一の否定を伴うが、彼は命題二も真だとは思っていない (ジムのような不合理な情動のケースがあるので) (1)。ウォルトンの見解に対す

る代替案であり、「思考理論 (thought theory)」として知られている理論を最初に公式化した一人でもあるピーター・ラマルクもまた、命題一を否定しているように思われる。ラマルクによれば、「ウォルトンと私はお互いに、「スライムが怖い」というチャールズの主張」は文字通りには真ではないことを認めている」⁽²⁾。彼は、サリーがアンナを憐れむとされているという点に関しても、同じことを言うだろう。このことは、ラマルクもまた命題一を否定していることを含意しているようにみえるが、彼は命題二も偽であると主張しているように思われる。

このパラドクスを解決するためには、我々は相矛盾する命題のひとつを排除する方法を見つけさえすればよい。一見すると、命題二を排除するのが簡単そうである。そうだとすると、命題二を排除する論者が、それでこの問題は済んだとしないのは、なぜなのか。単純に命題二を排除して、パラドクスは解決したと宣言できない理由が、なおあるのか。

現在多くの論者は、これこそが追求すべき方向だと考えている⁽³⁾。

私は、このパラドクスについての他の解決法を真剣に考える理由が、今もなおあることを主張しようと思う。我々はそのパラドクスに導かれて、フィクションに対する我々の反応の本性と多様性について、考えることになる。我々が、この本性と多様性について正当に把握しようと試みたうえで、このパラドクスに戻ってくるならば、どの言明を排除すべきであるかは、当初考えていたほど明確ではなくなるのだ。

別の解決法

さて、命題二以外を否定する解決法をいくつか概観することから始めよう。命題三を疑う者たちは、サリーが小説に没頭するうちに、アンナが単にフィクション上の人物であるという信念を忘れているか、あるいは宙づりにしているのではないかと思っている。しかし、このアプローチにはすぐに問題が出てくる。アンナのフィクション性とアンナを取り囲む出来事

のフィクション性に完全に気付いているときでさえ、それでもなお小説に感動することはあり得るだろう。そういうわけで、大半の哲学者は命題一と命題二に注意を向けてきたのである。我々は今、命題二の否定に代わるものに注目しているため、命題一を否定するやり方に取りかかることにする。

サリーがアンナ・カレリーナに反応する際、情動的反応に近いものを感じることは誰も否定しない。この主張は、サリーは何かを感じているが、彼女が感じているものはアンナへの憐れみではないという主張の一種である。さらに続けて、サリーは憐れみを感じているが、それはアンナに対してではないという主張、あるいはサリーは憐れみ以外の何かを感じているという主張も可能である。両方のアプローチを支持する者たちがいる。ある小説を読んでいると、アンナと似た運命に苦しむ実在の人物が思い浮かぶこともあるだろう。そのときは何の問題もなく彼らを憐れむことだろう⁽⁴⁾。あるいはまた、特に誰かを思い浮かべるでもなく、アンナと似た運命を持つ者を憐れむこともあるだろう。我々が実際に知っている、あるいは単に仮定している実在の人物にまで、我々の憐れみを広げることもあるだろうというだけで、上記のことについて正しい部分もあることは、一般に認められている。しかし、この案がその問題の一般的な解決法として、幅広く受け入れられることはない。なぜなら、この案は実際には末梢的なケースであるものを取り上げて、それを中心的な現象であるかのようにしようとしているからである。小説を読むとき、あるいは演劇や映画を観るとき、我々はそのフィクションに集中しているのだ。我々は、フィクション作品の登場人物に起こることを実際に経験する実在の人物と面識がないかもしれない。あるいは、もし面識があったとしても、彼らについて考えないかもしれない。さらに、そのような仮定的なケースの人物は、フィクションの登場人物ほど我々を感動させはしないだろう。最も重要なことは、我々が注意を向ける主要でしばしば唯一の対象が、フィクションであるということだ。それゆえ、満足のいく解決法であれば、われわれの感情を喚起する当のフィクションを中心に考えるべきである。

おそらく、ラマルクの見解も、この種の解決法にあてはまる。彼は、チャールズが文字通り (literally) にはスライムを

怖が……っていない（そして、憐れみについても同様のことを言う）と言いながら、チャールズが現実（real）の恐怖を感じていると主張するのである。私が「おそろく」と言ったのは、ラマルクがなぜ、自ら否定したことを否定するのが私にはよく分からないからだ。ラマルクによれば、チャールズの恐怖の対象、すなわち彼が怖がっているものは、「想像されたスライム」である。しかし、想像されたスライムを怖がること（すなわち、想像の志向内容を怖がること）は、フィクションに没頭するという文脈において、当のスライムを怖がることに等しいと考えられるものである。もしも、チャールズが実際のスライム（もしいたとすれば）を怖がっていたとしたら、そのとき彼の恐怖は、映画に対して向けられるのではなく、映画が想起させる実際の事物に対して向けられる。

上記とは異なる解決法が提示するのは、アンナを憐れむということが、作品に対する我々の想像的な反応の一部であるというものだ。我々は、我々の想像においてアンナを憐れむ。このことは、我々が文字通りにはアンナに憐れみを感じないということの意味する。しかし、このことは、我々が文字通りには何も感じないということを含意しているわけではない。我々はアンナを憐れむことを想像しているだけだが、我々は実際に憐れみを感じる際に持つのとほぼ同じ生理的反応を持つ。その結果、二つの経験、すなわち想像上憐れむことと実際に憐れむことは、ほぼ同じように感じられる。さらに、我々がある情動、それも強い情動を感じていると言うことさえできる。しかも、実際の憐れみの典型的なケースとは違う——憐れみの対象（アンナ）の實在に對する信念の欠如や、或る人の感情に伴う行為（例えば、助けを申し出たり、慰めの言葉をかけたりなど）の不在——ので、その情動や感情は憐れみとして分類されるべきではないということになる（5）。

この案は、多くの有利な点がある。その案は、なぜフィクションそれ自体が我々のなかに強い感情を生み出すのかについての説明を提示する。その説明は、フィクションが喚起する多様な情動を超えて、非常に一貫している。それはまた、実際に誰かを憐れむことと、アンナに関してサリーに起こること、すなわち、より一般的にはフィクションに対して情動的な反応を示す際に起こっていることとの間の違いをも説明する。実際には、ラマルクの場合も同じことを説明している。ラマルク

であれば、サリーは現実の憐れみを感じ、チャールズは現実の恐怖を感じると主張するだろうが、これらのケースは、いくつかの点において、実在の人物や現実の恐怖に対する情動的な反応と異なっている。

特別な種類の憐れみ？

ここで、フィクションの登場人物との関係において「憐れみを感じる」と、本論文の最初のほうで命題二の反例として言及した他のケースとの間の最も重要な違いを強調したい。これらのケースはすべて、われわれの心のなかに、ある命題が提示され、それに対してとる態度が我々の感じる情動を部分的に招くケースである、と特徴づけることができるだろう。過去に存在した人々に対する憐れみの場合、その態度とは彼らが苦しんでいたと信じることで、つまり信念であり、それは現在苦しんでいる人々に対して我々が持つのと同一態度である。未来に向けられた情動の場合、その命題とは、或る出来事が起こるだろうということであり、それに対する態度もまたそれを信じる信念である。これらの状況における信念は、私が何を感じているのかについて説明するのに十分である。もしも、私がそろそろやってくると思っている嵐を恐れるならば、私を危険にさらす何かが起こるかもしれないという信念は、私が抱く恐怖の感情を説明するのに十分である。嵐が決して起こらないということは、たいした問題ではない。そうなる可能性があるという私の信念こそが、私の情動を説明するのに必要不可欠なのである。これに対して、サリーがアンナを憐れむケースの場合、サリーの心に提示された真なる命題は、誰かが苦しんでいること、あるいは誰かが苦しんでいた、または苦しむだろうということではなく、フィクションにおいて誰か（アンナ）が苦しんでいるということなのである⁽⁶⁾。誰かが苦しんでいることがフィクション上は真であると信じる一方で、憐れみを感じていないというケースも数多くある。ここに、ひとつの架空の例がある。以下の文章で始まる小説を想定しよう。「三年もの間、干ばつが続き、人々は大いに苦しんだ。ジムは飢えに苦しんでいたが、彼の子供たちのことのほう

を心配した」。人は情動を感じることなく、これらフィクション上の真を受け入れる。ジムとその家族についてもっと読み進めれば、これは変わるかもしれないが、その場合、そのストーリーにおいて、フィクション上真である事柄に関する信念以上のものが求められるというのは、まず妥当であるだろう。それはつまり、その苦しみを（より生き生きと、そしてその分よりよく）想像するということである。もしも、これが正しければ、サリーが何を感じているかについて説明するためには、全く異なる態度が求められる。すなわち、信じるということよりは、むしろ想像することである。もしそうであるならば、サリーが想像上アンナを憐れんでいるとは、誰かがひどく苦しんでいるという命題に対してひとが持つ態度が、信じること (believing that) というよりは、むしろ想像すること (imagining that) であるという意味において、そうなのである。

嵐を恐れることと「アンナを憐れむ」ことの間のこうした違いは、ウォルトンとラマルクによって認められている。実際、彼らの見解は、フィクションのパラドクスに対する主要な代替の解決法のうち、二つの異なる立場を代表しているにも関わらず、多くの共通点をもっている。彼らは、サリーの心理状態の中心的な面とは、彼女がまざまざとアンナの苦しみを想像することであるということに同意している。彼らはまた、このことにより結果的にサリーは強い感情を経験し、その強い感情は憐れみの現象的、生理的反応（それらが実在するかぎりで）をもつということに同意する。私は、これをサリーがもつ中核的心理状態 (core psychological state) と呼ぶことにしよう。最後に、先にも述べたことだが、彼らはサリーがアンナ・カレーニナに文字通りの憐れみを抱いているわけではないことにも同意する。

もしも、サリーの心理状態を憐れむと呼ぶべきかどうかという点が、彼らの間に唯一残っている意見の相違だとすれば、彼らの間には言葉上の違いしかないと思う人もいるだろう。しかし、その違いにはそれ以上のものがある。ラマルクは、サリーの憐れみが志向対象を持つと主張する一方で、サリーが誰かを憐れむことを想像しているということは否定する。これに対して、ウォルトンは、サリーはアンナを憐れむことを想像するのだと主張する。私は、志向対象に関するウォルトンの見解については、あまりよく分からない。サリーがアンナを憐れむのを想像するとき、この想像はラマルクが取り上げるも

のと同じ志向対象を持つのだろうか。一方、ウォルトンはラマルクの言う思考なるものが、ふつうは情動の適切な対象にはならないと言う。彼はこれを、想像された情動のほうに持ち込むだろう。ウォルトンによれば、サリーは実際の対象に対して情動を感じることを想像するのであって、思考内容や志向対象に対してではない。これは確かに正しいが、サリーが思い続けている実在の人間といった実際の対象は、もちろんいない。これに対して、ラマルクならば、想像された実際の対象とは、正確には現実の志向対象によって彼の心に思い浮かんだものであると言うだろう。そういうわけで、わたしとしては、両者にあるのは実際の意見の相違というよりも、むしろ誤解ではないかと考えている(7)。

ついでに指摘しておく、ラマルクの説は情動の志向対象の本性について、さほどはっきりとしているわけではない。ホラー映画を観ている際のチャールズの恐怖について議論するとき、ラマルクはある箇所、志向対象は「あの想像されたスライム」(8)だと言っている。のちに、彼が言うには、チャールズは「自分が見ているものが現実だとは信じていないので、このスライムが今にも自分を飲み込みそうだ」(9)と怖がることはなく、むしろ「ある凶暴なスライムに攻撃される」(10)ことを怖がっているという。このことが示唆するのは、チャールズの思考なるものとは一般的なものであり、それは、彼を飲み込むとする(実在の)スライムがいて、この恐怖の志向対象が不定(indefinite)の対象、すなわちある想像されたスライムだというものである。しかし、アンナを憐れむという問題にラマルクが再び立ち返るとき、我々は幾分異なる説明に出くわす。我々の「本物の憐れみは、誰かに向けられるのではない」(11)、すなわち、その憐れみはチャールズの恐怖の場合とは違って、不定の対象に向けられるのではなく、「この人物」に向けられる。とはいえ、サリーは、『アンナ・カレニナ』との関係において、チャールズがスライムの登場するホラー映画との関係において立たされている状況と異なる状況に立たされているわけではない。チャールズがスライムの存在を信じないように、サリーもアンナの存在を信じない。しかし、ラマルクによれば、チャールズの場合とは異なり、このことは、サリーの感情が、はっきりと確定した(definite)想像された対象に向けられることを何ら邪魔しない。この違いはおそらく、恐怖と憐れみの情動に違いがあることによるのだろう。

しかし、もしそうであるとしたならば、ラマルクはそのことを明示していない（我々はこの問題に立ち返る）。しかしながら、チャールズの恐怖の対象に関する、一見すると異なる二つの説明を含むこれら様々な主張を考慮すると、フィクションによって生み出された情動の志向対象が一体何であるというラマルクが信じているかについては、はっきりしていない。フィクションに対する現実の情動的反応、あるいはフィクションに対する想像された情動的反応の志向対象に関して、ウォルトンとラマルクとの間に、本当の意見の相違があるうとなかろうと、フィクションの登場人物を恐れたり、憐れんだりすることを想像するのかどうかについて、違いがあるのは確かである。これは、ラマルクがきっぱりと否定し、ウォルトンがはっきりと肯定するものである。私がここで主張したいのは、この論争においてどちらも完全に正しいわけではないということである。ラマルクの誤りは、我々がある登場人物に対して、情動的に反応することを想像するときもあるということと否定したことである。ウォルトンの誤りは、このことが、フィクションに対する我々の情動的反応に関する説明の本質的な部分であると主張したことである（12）。

想像の仕方と想像された憐れみ

これらの点を立証するために、我々は、フィクションの内容を想像する様々に異なったやり方を見なければならぬだろう。その一つのやり方は、自分が出来事についての事実に基づく説明を読んだり、聞いたりしていると想像することである。このことは、登場人物、彼に起こること、これらの出来事を我々に物語る語り手、そして我々自身が、みな同じ世界に属していることを、我々が想像するということを含意する。登場人物にある出来事が起こり、語り手は彼らが何とか対処することを知っており、それを我々に語る。このことは、共有された世界においてのみ起こり得る。それが含意しているのは、我々と語り手が、語られる出来事から時間的そして／あるいは空間的に離れ、その出来事に干渉できる立場にはいないにもか

わらず、登場人物、語り手、そして我々が、我々の想像するフィクションの世界に属している、と我々が想像しているということである。

他にも、共有された世界を想像するやり方がある。あるひとはフィクションの物語において、自らが出来事を直接目撃していると思うだろう。これは、語り手の存在がはっきりしない、あるいは全く存在しないときに、より起こりやすい。完全に対話形式で書かれた小説を読むと、ひとは、自分がその会話に参加している一員ではないにもかかわらず、その会話を聞き、あるいは立ち聞きしていると想像するように導かれるだろう。同様に、演劇や映画でも、出来事を目撃しているように想像するだろう。

フィクションの世界に身を置かずに、ある作品において、フィクション上真であるものを想像するやり方はあるのか。そのやり方はある。ある物語に関して、ひとはフィクションの登場人物や出来事の世界を想像し、また誰かが他の誰かにこれらの出来事を語っていると想像するが、しかし、自分がその話を聞いている聴衆の一部として想像しているわけではないということは、あり得る。我々は、アンナが愛人をつくったことを我々自身が耳にしているとは想像しない。我々はただアンナが愛人をつくったと想像し、アンナが愛人を作ったことを誰かが話していると想像するが、しかし、われわれに対して、それを話しているとは想像しない。

こうしたやり方で想像することは、いずれも可能である。あるフィクションにアプローチする正しいやり方は、ひとつしかないのだろうか。小説といったフィクションのひとつのタイプに限ったとしても、やり方がひとつしかないというのは疑わしい。

さて、我々がもつ情動的反応という問題に、議論を戻すことにしよう。我々が、フィクションの登場人物と世界を共有していると想像すると仮定しよう。我々は、ある登場人物についてのストーリーにつき従うなかで、事態が非常に悪化し、登場人物がひどく苦しんでいることについて聞かされ、あるいは目撃していると想像する。我々が憐れみと呼びたくなる感情

が、湧きあがる。その登場人物に憐れみを感じることは、我々のごっこ遊び (make-believe) の一部だろうか。ラマルクは、この主張を否定する。我々は、そのストーリーの悲しい出来事について聞かされていると想像するが、我々が感じるものは、ごっこ遊びの一部ではない。しかし、私は、二つの異なる事柄が、ここにおいて混ざり合っているのではないかと考えたい。もしも、私がフィクションの世界に自ら属し、登場人物の悲しい運命について聞かされていると想像しているならば、たぶん自らがその登場人物を憐れんでいると想像もしているだろうとするのが、自然である。そして、このことが、本物の強い感情を導くことがありうることを誰も否定しない。この本物の感情は現実の憐れみに似ているが、いくつかの重要な点において、通常のケースの憐れみとは異なる。それゆえ、混ざり合っているかもしれないものとは、本物の強い感情はフィクションではないということと、登場人物に対して憐れみを感じていることがフィクションナルであるということ、あるいは想像されているということ、である。

自らがフィクションの世界に属していると想像することなく、フィクションの悲しい出来事を想像すると仮定しよう。我々は悲しい出来事を目撃しているとも、その出来事について聞かされているとも想像しない。それでも、憐れみと呼びたくなく感情が、我々のうちに湧きあがる。ここでは、我々が登場人物に対して、憐れみを感じているようにごっこ遊びするというのは、妥当ではない。この状況においては、この種のごっこ遊びを行うように仕向けるものが何であるかは、はっきりしないのだ。にもかかわらず、我々のなかに感情が湧きあがるのは、われわれの心のなかで命題が提示されて、我々がその命題を真だと想像しているからだ。したがって、ある登場人物を憐れむと想像することに、憐れみに似たものを少なくとも感じさせるような現実の強い感情がともなうのは、ただある特定の場合だけである。憐れんでいると想像することが起こり得るのは、ある特定の想像のモードが用いられるときだけであるし、その場合でさえ、それは憐れみに似た現実の感情にとって、必要ないのかもしれない。

このことが全く正しいとすれば、我々がフィクションの登場人物を「憐れむ」際に起こる本質的な心理状態とは、まさし

く先にサリーの中核的心理状態として特定したものである。すなわち、彼女は、登場人物の苦しみをありありと想像し、その結果として、憐れみと現象的に共通する強い感情を生みだす生理的変化に至る。これは、ウォルトンやラマルク、そしてフィクションのパラドクスを論じてきた多くの他の研究者たちも認める心理状態の一側面である。

境界線上の憐れみ

この中核的心理状態とは憐れみなのか。それは、フィクションの登場人物への憐れみなのか。私がすでにそれとなく示してきたことだが、（ラマルクには失礼ながら）もしもそれが憐れみだとすれば、我々の感情を導く命題的態度は、登場人物が苦しんでいると想像する（すなわち、ある人が苦しんでいると想像し、登場人物がこの人であると想像する）際の態度であることから、それがフィクションの登場人物への憐れみだと言うのは、妥当なことであろう。私はまた、もしもそれが憐れみだとすれば、その憐れみは、ある特別な種類の憐れみであるとも述べてきた。しかしながら、私の主張の要点は、我々がその憐れみを特別な種類の憐れみとして分類するか、あるいはその性質上、せいぜい憐れみの主要な（mainline）ケースと対比して、境界線上の（borderline）ケースにすぎないという理由で憐れみではないとして分類するかは、ほとんど問題ではないということにある。その憐れみを境界のどちらの側に置くかによって、我々はフィクションのパラドクスを解決するべく、命題一を否定するか、もしくは命題二を否定することになるだろう。（ウォルトンがそうするように）たとえば、我々が独立した根拠に基づいて、命題二を否定する場合でも、結局は命題一を否定することになるだろう。

この主張を論証するために、我々は、主要な情動とその境界線上のケースとを分けなければならない。まずは、主要な情動から始めるのがよいだろう。しかしながら、ここにおいて、我々は情動についての一般にひろく受け入れられた理論がないという問題に直面する。なるほど、かなりの数の支持者を持つ認知説や非認知説というものはあるが、私はどちらのアップ

ローチをとっても、同じ結果になることを主張したい。この結果が認知説において驚くべきことではないのは、まさにその説こそが、命題二に妥当性を与えていたからなのである。しかし、過去や未来に向けられた情動や不合理な情動について、すでに概観したことにかんがみるならば、妥当と思える認知説でも、命題二を主張すべきではないだろう。そのような説が主張しようとしているのは、情動を構成する中心要素とは認知的判断あるいは信念であるということだ。憐れみの場合、その判断（信念）とは、誰かがかつて苦しんでいた、現に苦しんでいる、あるいは今後苦しむだろう（今後苦しむかもしれない）ということになるだろう。そのような判断の前提のひとつにあるのは、判断の対象がかつて実在した、現に実在する、あるいは今後実在するだろう、もしくは実在することがあり得るだろうということである。認知説にとっては本質的ではないだろうが、これになお、そのような判断が原因となって、生理的変化とそれに伴う現象的側面（感情作用）をひき起こし、さらには行動への動機づけとその指針をもたらすという主張も付加されてもよいだろう。一方で、情動の非認知説には、さまざまな立場がある。そのひとつに、ジェームズ・ランゲ理論がある。それは、情動とは肉体的変化によって引き起こされる感覚であるとする理論である。しかし、この理論では、なぜ情動が自分自身の安全や他人の苦しみといったものを含むかについて、説明することは難しい。というのも、この理論には、心的な表象作用の面が欠けているからだ。その理論はまた、なぜ情動が理性的な評価の影響を受けるのかについても、説明することが難しい。情動についてのより妥当な非認知説は、ある種の複雑性を付け足すことによって、これらの問題を解決する。情動とは、他者の苦しみや危険、喪失などの表象である（あるいは、それらに関わる）。しかし、すべての表象が概念的、したがって認知的である必要はない。これらの事柄の非概念的表象が表すこともある。というのも、それらの表象は、これらの事柄の信頼できる探知機だからである。（ここにおけるひとつの問題は、いわば如何にしてあるものが信頼できる危険の探知機となり得るかについて、説明することである。しかし、我々の不合理な恐怖すべてを説明しようとすると、その探知機は定期的に、危険ではないものを危険なものとして誤って表象することになるだろう）。肉体的変化の諸感覚が、探知機としての役割を果たすよう展開することもあり得る。

その際には、それらは自らが探知する事態の非認知的表象となる。その全体像とは、以下のようなものである。何かが特徴的な生理的変化を引き起こす。この何かは、ある関心事についての認知的判断でもあり得るが、たいていは認知的判断以外の何かである。生理的変化は、関心事についての非概念的表象として機能するある特定の感覚を引き起こす。その結果、その特定の感覚は、行動の動機づけやその指針に結び付けられた、ある特定の傾向をもった振る舞いを引き起こす⁽¹³⁾。

我々が今扱っているフィクションへの反応は、いくつかの点においては通常のケースの情動的反応と連続しているが、他の点においては大いに異なっている。サリーの感情と主要な情動との間の最も重要な違いとは、我々が今まで強調してきたのだが、サリーが想像するという場合に見られる、サリーの感情を導く命題的態度である。情動の認知的理解にもとづけば、その典型的な態度とは、信じることである。しかし、非認知的理解にも、信念に似たものはある。それは「身体化された評価 (embodied appraisal)」であり、関心が向かう現実の対象を探知することが、その機能となっている。加えて、認知説と非認知説のいずれにとっても、情動はそれぞれに特徴的なやり方で、行動の動機づけやその指針と結び付いたある傾向をもった振る舞いに関連づけられるだろう。興味深いことだが、ある情動的反応をみちびく態度とは想像することであるという事実が、ただちに主要な情動に典型的な動機づけや行動の指針となるシステムとの繋がりを断ち切るということはない。ジェンドラーとコヴァコーヴィチが指摘したように、我々が頭で考えるだけの場合でも、我々は想像もし、また感情を伴って反応するのである⁽¹⁴⁾。通常、情動がシミュレートされるだけでも、当の情動に特徴的な生理的反応が伴うということが、明らかにされている。この場合、これらの情動的反応が行動を導くシステムに関連付けられるというだけではなく（主要な情動のときのような直接的な仕方ではないにせよ）、これに伴う生理的反応も一見すると、行動を導くための理由づけにとつて本質的なものである。

ジェンドラーとコヴァコーヴィチの考えによれば、上記のことは、われわれが頭で考えるときに我々が感じるものも、本物の情動であるということを示している。そして、同じ理由から、我々がフィクションに関わる際に感じるものも、本物の

情動なのである。ジェニファー・ロビンソンも、同じ結論に至る⁽¹⁵⁾。彼女は、情動に関する彼女なりの非認知的説明を提示する。ロビンソンによれば、情動とは、非認知的な「感情による評定 (affective evaluation)」を生み出す刺激から始まるプロセスである。これはのちには、より認知的な評定や他の心理状態につながるにしても、その感情による評定こそ、ロビンソンにとって情動を認証する目印であるように思われる。少なくとも、それはフィクションのパラドクスを議論する際に、彼女が強調するプロセスの一部である。彼女の説の要点は、同じ非認知的な感情による評定が、フィクションの受容と関連しても生じるということであり、このことから彼女は、他の文脈において生じると同じ情動が、フィクションの文脈においても起こると推測する。

とはいえ、これらの結論のいずれも、つい今しがた挙げた著者たちが想定するほどには、明白なものではない。ジェンドラーとコヴァコーヴィチが示すのは、頭で考える際に生じる情動的反応は、フィクションに対する情動的反応と大いに共通するということである。しかし、ウォルトンとラマルクの解決法は、共にこの事実を認めているし、これを考慮に入れることもできる。フィクションに反応する際に、本物の憐れみや恐怖を感じることを否定する人々は、その恐怖や憐れみが情動と大いに共通していることを否定しているわけではない。ここで、彼らが特に主張するのは、それらが生理学的に分別不能だということである。しかし、その彼らにしても、フィクションへの反応も、頭で考える際に生じる反応も、これを本物の憐れみや恐怖の例として分類はしないだろう。

ロビンソンのアプローチに関して、現実の出来事に反応する際とフィクションに反応する際に、同じ感情による評定が生じると仮に容認してみよう。とはいえ、私は、これが実際のところ、真であるかどうかは分かっているのだが（ひとつには、心理学や哲学のなかに、一般に受け入れられた情動説がないということ。もうひとつには、ロビンソンは感情による評定が常に生じると主張する一方で、そうした評定が恐怖や嫌悪のような原始的な情動に対しては生じるが、憐れみや憤りのような感情に対しては生じないらしいということ）。しかし、ロビンソンのこの仮説を受け入れたとしても、今なお二つの問題

点を指摘できる。第一に、彼女は、感情による評定とは實際に何であるのかを全く明らかにしていない。妥当なことだが、それは、上述した身体化された評価と一致する。すなわち、それはある関心の非認知的表象である生理的変化の感覚である。第二のより重要な点は、そうした感情作用は以下に示すように、我々がフィクションに反応する場合には、フィクション以外の文脈のときとは幾分異なる機能的役割を持っているということである。そのことが、この感情作用をどう分類すべきかをあいまいにするのである。

第一に、行動から切り離されることで、我々のフィクションへの反応は、頭で考える際に生じるシミュレートされた情動の場合よりもさらに、主要な情動からは隔たっている。もっとも、我々が先に見たように、主要な情動さえも意欲をかきたてたり、行動を導いたりすることに失敗することもあり得る。にもかかわらず、フィクションへの反応は、それが特殊なしかたで機能することをゆるすような、いっそう興味深い諸特徴を持つ。そのひとつは、我々がフィクションの出来事や登場人物に対して、強い情動的反応を経験するときでさえ、我々はこれらの出来事との距離を維持することができるということである。このことにより、我々はフィクションを美的に鑑賞することができるのだが、情動を誘発する現実の出来事に関しては、われわれはそうなることはできない。このことにより、我々はまた、これらフィクションの出来事とそれに対する我々の反応について、それらから学ぶというようにして、これを反省することもできる。このことは、現実の出来事への情動的反応でも起こり得るが、まさに出来事が起こっているその最中に、これと同様のことをするのは非常に難しい。第二に、我々がフィクションに対して反応するかどうか、またどのようにに反応するかという問題は、現実の出来事の場合よりも、はるかに選択の余地がある。人々は咎められることなく、同じフィクションの出来事に対して、異なる情動的反応を示す。また、ある人々は他の人々よりも非常に落ち着いて、フィクションを受容するということのも、咎められることはない。しかし、苦しんでいる親友や遠く離れた土地で苦しむ見ず知らずの人々にすら、憐れみを抱かないのは、何かが欠けている。最後に、我々はフィクションへの情動的反応に対しては、より制御がしやすい（完璧な制御には、ほど遠いが）。例えば、我々は、

ある作品が特定の反応をかならず引き起こすというわけではないと自らに言い聞かすことができる。このことにより、さもなくば生じたであろう情動的反応を阻止することができる。以上のことから、フィクションへの反応は、典型的な情動的反応と類似しているにもかかわらず、主要な情動とはかなり異なる機能的側面を持っているということが想定される。

その他の情動

我々は今まで、ひとつの情動、すなわち憐れみに焦点を当ててきた。憐れみは多くの情動と同様に、他者に向けられる。憐れみに向けられる者は、情動を感じる人物ではなく、別の人物である（自己憐憫という特別なケースは除いて）。というわけで、私が、憐れみに向けられる人と世界を共有していると想像しないうきでさえも、私の想像のなかで誰かを憐れむことはできる。誰かが苦しんでいるのをありありと想像するとき、私は主要な憐れみと似た情動的反応を持つ。これとは別に、当の主体に向けられる情動もある。もしも、私が迫りくる嵐を恐れるならば、私は典型的なかたちで自分自身、また自分とかかわるもの的心配している（私には影響を与えない嵐の軌道上にいる人々を心配するようなときには、恐怖もまた他者に向けられ得る）。恐怖に似た、主体に向けられる情動を引き起こすとされている様々な芸術ジャンルがあるが、憐れみを扱ったのと同じ仕方です、それらの情動を扱うことができるのか、それとも異なるアプローチが必要なのかという疑問が出てくる。

異なるアプローチが必要であると信じるための、それぞれに全く異なった二つの理由がある。ひとつの理由は、少なくともフィクションに関しては、しかも多くの場合、恐怖に似た、主体に向けられる本物の情動を我々が感じるかどうかについての懐疑を醸成する。(Neil 1993, Davies 2009)。ここにおける要点は、アンナが苦しんでいるということは、フィクションにおいて端的に真である一方で、モンスターが私を襲うというような命題に関しては、事態はまったくそうではないとい

うことである。もしも、情動の認知説を用いて、フィクションのパラドクスに臨み、観客に恐怖を約束するようなホラー映画を観る者が持つであろう、フィクションにおいて真であることがらについての信念を探してみても、見つかりはしないだろう。しかしながら、我々がすでに主張してきたように、我々を情動的反応に導くのは、フィクションにおいて真であるものについての信念だけではない。必要とされているのは、ありありと想像することである。そこで、我々としては、恐怖に似た反応を引き起こすのにふさわしい想像というものが、あるのかどうかを問わねばならない。

想像の中でモンスターと世界を共有する場合にも、考慮すべき様々なケースがある。もしも、モンスターが人々を襲っているという事実についての報告を受けていると想像し、しかし、自分はこれらの出来事から時間的にも空間的にも離れていると想像するとき、そのストーリーのなかで語られている時間と場所において、私はこれらのモンスターに襲われているとは想像しないというのは、妥当なことだ。モンスターは、フィクションをもちいたゲームにおいても私を襲うことはない。しかし、モンスターは私にとって、より一般的な脅威となると私が想像することはあるだろう。我々は世界を共有しているので、私がその世界にいる以上、モンスターがどこかに潜んでいると想像することもできるだろう（これは、チャールズがある・獐・猛・な・ス・ラ・イ・ムに襲われることを怖がるという、ラマルクの考え方と似ている）。そのとき、私が危険な状態にあり、それを怖がっていることが、フィクションナルであるということはあるだろう。そして、これによって、たとえ機能的な役割においてはいささか異なるとしても、主要な恐怖の場合と似たやり方で、ある感情が私のなかに湧き上がることもあるだろう。そうだとすると、この感情は、その物語のなかで語られている出来事と直接的に結び付けられたものではないし、その出来事に向けられたものでもない。

ホラー映画を観るときのように、その物語の出来事を実際に目撃していると想像する場合は異なる。モンスターが、観客のほうへ方向を変えるようにみえたとき、そのモンスターが観客のひとりである私に襲いかかってくると想像することは、たやすいだろう。

適切な想像が、恐怖に似た反応をもたらすケースもある。しかし、想像しているフィクション世界から離れてしまうと、モンスターが私を襲うという命題を真だと想像する余地はない。もしも、モンスターと私が想像のなかで世界を共有していないならば、そのような恐怖があると想像することは、不適切である。それでもなお、モンスターが突如、スクリーン上に現れたとき、私がびっくりする (be startled) ことはあるかもしれず、そして、これにより、恐怖の場合と同じ生理現象が生じることもあり得るだろう。

情動の非認知説の支持者なら、今まさに言及した現象が、単なる生理的反応における恐怖に似たものではなく、端的に恐怖のケースであると主張するだろう。「大きな物音を聞く、突如救いの手がなくなったと感じる、蛇を見る、あるいは危険にさらされていると判断することで、恐怖が引き起こされることもあり得る」⁽¹⁶⁾。これらのいずれもが、非認知的に危険を表象する感覚とともに、適切な生理的反応を引き起こすとすれば、そのとき、我々は非認知説に基づいて、恐怖のケースを持つことになる。そこで、恐怖は憐れみと異なる扱いをすべきであるという、第二の主張がなされることになる。フィクションの文脈において、憐れみに似た情動的反応が、とりわけ想像といったある内容になった心理状態とは別の何かによって、引き起こされるということは、ほとんど不可能である。しかし、我々が今考えているケースは、想像ではなく、むしろびっくりするという事例である。それが可能なのは、恐怖が憐れみよりも原始的な情動だからだという議論もありうるだろう。フィクションの文脈でも、そうではない文脈でも、恐怖というものは、適切な認知的内容がなくなるとも生じ得る。というわけで、恐怖はこれらさまざまな文脈において、憐れみとは異なる扱いをする必要があるのだ⁽¹⁷⁾。

私は認知説と非認知説とのいずれに対しても、中立的な立場にいたので、びっくりすることによって始まった反応が、恐怖に似た反応なのかどうかについては未決定にしておく。たとえそれが恐怖に似た反応であっても、それが生じる文脈が、他の文脈における役割とは異なる機能的役割をその反応に与えることによって、その調子が変わるだろう。そうだとすると、それは恐怖であるが、特別な種類の恐怖であるとか、それは恐怖に似たものであるが、厳密には恐怖ではないとか、そう主

張することもあるだろうということになる。こうした例において、どちらを主張すべきであるかは実際のところ、どちらの情動説が真であるかによっている。

恐怖に似たものを感じる更なる状況が、もうひとつある。すなわち、モンスターに襲われる登場人物に感情移入 (empathy) するときである。感情移入は、他人が感じるものを感じることに関わる。それゆえ、怖がっている登場人物に感情移入する場合、私は恐怖に似たものを感じるだろう。感情移入における「恐怖」は、現実の恐怖とまったく同じだというわけではない、あるいは少なくとも標準的なケースの恐怖ではない。というのも、私は自分自身が危険にさらされていると信じていないし、想像もしていない。私は、他の誰かが危険にさらされていると想像し、それから彼らの立場に身をおき、あるいは彼らの心の有様をシミュレートする。このケースにおいて、私が感じるものをいくら特徴づけても、それは、わたしがフィクション世界に対してとる関係とは、かわりがない。私自身がフィクションの登場人物と世界を共有していると想像しなくても、私は依然として、彼らに感情移入できるし、ある仕方で彼らを感じるものを感じる。ただし、感情移入に関して、特にはっきりさせておかねばならないのは、ここでは、「ある仕方で (in some manner)」という限定詞が要請されているということである。登場人物が感じるものを感じるということが何を意味しようとも、彼らが持つまさにその情動そのものを持つということが問題になっているわけではないのである。

結論

フィクションのパラドクスに関心を持つ理由は、今なおある。というのも、そのパラドクスが如何にして解決されるのかについて考えることで、我々は、情動的に反応する様々なやり方に敏感になれるからだ。このことにより、我々は主要な情動的反応と、それ以外のものを区別することができる。この区別が一度なされれば、我々が、そのようなフィクションへ

の反応を現実のケースの憐れみや恐怖と呼ぶか否かは、さほど重要ではなくなる。重要なのは、フィクションの文脈において働く心理状態は、主要な文脈の場合とは異なる機能的役割を持つということである。それが示唆するのは、さらに他の文脈における情動的反応もまた、機能的役割において異なるだろうということだ。こうした情動的反応の異なりについて敏感になることは、情動を分類する際に役立つだろうし、同じように見えるものが、様々な異なる機能を果たすことができることを理解するのにも役立つだろう。我々は、単に命題二を否定するだけでは、そのような敏感さを得ることはしないだろう。我々がそれを得るのは、命題一を否定する様々なアプローチを試みることによってなのである⁽⁸⁾。

註

- (1) Kendall Walton, "Spelunking, Simulation, Slime: on Being Moved by Fiction," in *Art and Emotion*, Mette Hjort and Sue Laver (eds.), Oxford: Oxford University Press, 1997, 37-49.
- (2) Peter Lamarque, *The Fictional Point of View*, Ithaca, N.Y.: Cornell University Press, 1996, 127.
- (3) Noel Carroll, *The Philosophy of Horror or the Paradoxes of the Heart*, London: Routledge, 1990, Tamar Szabo Gendler, and Karson Kovakovich, "Genuine Rational Fictional Emotions," in *Contemporary Debates in Aesthetics and the Philosophy of Art*, Matthew Kieran (ed.), Oxford: Blackwell, 2006; Richard Moran, "The Expression of Feeling in Imagination," *Philosophical Review* 103, 1994, 75-106; Jenefer Robinson, *Deeper than Reason*, Oxford, Oxford University Press, 2005, 230。
- (4) William Charlton, "Feeling for the Fictious," *British Journal of Aesthetics* 24, 1984, 206-16.
- (5) Kendall Walton, *Mimesis as Make-Believe*, Cambridge, MA.: Harvard University Press, 1990.

(6) これは、フィクションに対して情動的に反応するケースにおいて、新たな問題を引き起こす。これが問題となるのは、特に、アンナ・カレーニナといったフィクション上の名前は何も指示しない、すなわちこれらのケースにおいては心のうちに提示された命題内容であるものを指示しないことを信じる人々にとってである。その問題が、文字通りアンナを憐れむと主張する人々と、我々が感じるもののある種の情動として、あるいは認知的内容を持った心的状態の類として特徴づける限りにおいて、文字通りにはアンナを憐れんでいないと主張する人々との両方に当てはまることに注意せよ。このことは、フィクション上の名前の意味論や心的表象の本性についての専門的な問題を生じさせるので、この問題の解決策についての議論は本稿の範囲を超えている。この問題に対する全く異なる三つの解決策については、Fred Adams, Gary Fuller and Robert Stecker, "The Semantics of Fictional Names," *Pacific Philosophical Quarterly* 78, 1997, 128-48; Gregory Currie, *The Nature of Fiction*, Cambridge: Cambridge University Press, 1990; Walton, *Mimesis*, 385-419 を見よ。

(7) ウォルトンとラマルクは、フィクション上の言葉の意味論に関して、意見が異なる。この意見の相違が、その言葉だけでなく、人々の思考にも適用なれるという点では、サリーに帰せられる想像内容にも違いが出るだろう。

(8) Lamarque, *The Fictional Point of View*, 126.

(9) Lamarque, 128.

(10) Lamarque, 128.

(11) Lamarque, 129.

(12) 以下に続く議論は、Stephen Davies, "Responding Emotionally to Fictions," *Journal of Aesthetics and Art Criticism*, 67, 2009, 269-284 から益を得たものでもある。

(13) この議論は、Jesse Prinz, *Gut Reactions: a Perceptual Theory of the Emotions*, New York: Oxford University Press, 2004,

The Emotional Construction of Morals, New York: Oxford University Press, 2007, 50-68 からのものでも。

- (14) Gendler and Kovakovich, “Genuine Rational Fictional Emotions.”
- (15) Robinson, *Deeper than Reason*, 140-154.
- (16) Prinz, *The Emotional Construction of Morality*, 63.
- (17) もうひとつの方法として、ティマー・ジェンドラーによって導入された「アリーフ (alief)」の概念に訴えることで、驚きを誘発する反応のケースにおいて、起っていることを表現することができる。アリーフとは、自動的に結び付けられる状態であり、それは典型的にある表象、ある感情、ある振る舞いから成るものである。それは、知覚的入力によって引き起こされる。チャールズは、自らに向かって不気味に現れるモンスターの突然の登場に驚いて、そのような危険はないと信じつつも、「危険な生物だ！助けて！隠れろ！」としたり、あるいはそのような類のことを思ったりする。Tamar Szabo Gendler, “Alief and Belief,” *Journal of Philosophy*, 510, 2008, 634-63 を見よ。これは、サリーがアンナを「憐れむ」ときに起ることは、全く異なるように思われる。サリーの場合は、自動的なものではなく、想像力が引き金となっており、高度に概念的である。
- (18) 貴重な助言をいただいた Stephen Davies 氏、Paisley Livingston 氏、そして以下の大学の聴講者に感謝の意を述べる。特に、嶺南大学の Derek Baker 氏と Kelly Trogon 氏、香港大学の Max Deutsch 氏と Kelly Inglis 氏、Chris Fraser 氏、北京大学の Li Xi 氏、香港科学技術大学の Chong Kim Chong 氏、東京大学の西村清和氏に感謝したい。